

共同記銘研究の展望

有馬比呂志*1・中條 和光*2

A Perspective on Joint Encoding in Memory Studies

Hiroshi ARIMA & Kazumitsu CHUJO

本研究は認知心理学における記憶研究を、個人と集団という観点から概観し、共同記銘という新たな研究領域を提案し、その重要性について考察することを目的とする。

近年の記憶研究を見ると、1980年代は Tulving, Schacter, & Stark (1982) によってプライミング技法が提案され、潜在的な記憶へと注意が向けられるようになったことに端を発する「潜在記憶研究」の時代である。それまでの記憶研究では、意識に上る顕在記憶だけに注意が集まり、想起意識はないが過去経験が現在の行動に影響を与えるという潜在記憶の研究は無意識へのアプローチであり、研究そのものも意識されてこなかった。日本の記憶研究を見ても、「1990年までの5年間の（日本心理学会の）シンポジウムにおけるキーワードは潜在記憶（implicit memory）である（太田，2000）。」というように、意識していない行動の解明を包含した人間への本質的理解を目指す研究が行われるようになってきた。

続く1990年代は、太田（2000）によれば、前半の5年間が自伝的記憶、顔記憶、目撃証言、記憶と感情、展望記憶などの問題からなる「日常記憶研究」であり、後半は偽記憶（false memory）など現実の裁判問題からなる「現実問題研究」である。

これらの流れは、実験室研究から自然な文脈でわれわれの親しみやすいテーマを扱う研究が増えてきた現れである。記憶研究においても、現実の人間生活における妨害・阻害要因を減じたり、より豊かに暮らすための貢献に注目する必要性が高まっていることを示唆している。今後の記憶研究者が心がけることは、日常記憶研究のみならず実験室研究においても、人間生活に貢献できるかどうかの展望を持つことではないだろうか。

このような記憶研究の流れを標榜しながら、本研究では記憶研究を新たな視点から眺め直し、新たな領域を提言する。この目的のため、記憶研究における記銘事態と想起事態の集団性・社会性に着目した。それぞれの事態における行為を個人で遂行する場合と集団で遂行する場合に二分し、4つの研究領域を表に示した。表のセルに従って、次のように考察を進める。まず、第1節では、個人記銘—個人想起に相当する伝統的記憶研究について概観する。ここでは、個人の記憶に焦点をおいた研究について考える。この節の後半では、集団、共同、協同といわれる社会的相互作用を有する複数の人が関与する記憶に関する研究について検討をする。第2節では、個人記銘—集団想起に相当すると考えられる目撃証言研究を考察する。目撃証言研究は個人記銘—個人想起にあたる認知過程も想定されうるが、証言という行為には目撃者に加えてその証言を得る他者が関与する場合がほとんどである。また目撃を集団で行うことも考えられ集団（共同）記銘事態と位置付けることも考えられる。しかしながら記銘事態（目撃）における協同性などの社会性が考慮された研究は少ないことから、この節では個人記銘—集団想起と

*1 広島文教女子大学人間科学部

*2 広島大学大学院教育学研究科

して分類し考察する。第3節では、集団記銘—集団想起である従来の共同（集団・協同）想起研究を概観し、共同記銘研究との違いを考察する。さらに、第4節では、集団記銘—個人想起に位置付けられる共同記銘研究を考察し、その教育分野への応用や他分野への発展性についても提言する。従来の記憶研究では研究対象として認知されていなかった領域である。なお、本論では複数の人が存在し、ほぼ同時に認知活動を行う場合、集団という用語を用いる。さらに、複数の人が存在しその間で何らかの社会性が考慮されうる場合は、必ずしも協力関係が成立していない場合も想定されることより、森直久（1995）を参考に「協同（collaboration）」でなく「共同（joint）」の用語を用いることとする。

表 記銘事態と想起事態における個人—集団からみた研究領域

		想 起 事 態	
		個 人	集 団
記 銘 事 態	個 人	伝統的記憶研究	目撃証言研究
	集 団	共同記銘研究	共同記銘研究・共同想起研究

1. 個人の記憶

人は生活を営んでいく中で様々な認知的処理を行っている。多くの情報を処理し活用している。情報を処理していく中で、すぐには処理しきれないものや、後で利用しようと考えている内容に関しては記憶が必要になる。記憶をより確かなものにするために、メモやビデオテープ、携帯電話やコンピュータなど各種の記憶媒体を使用し、多くの情報を画像やテキストとして残そうとする。しかしながら、それらの記憶媒体が使用できない場合、すなわち人間の内的処理のみで行われる記憶に関しては、客観的には正確でない現象が多く見いだされる。このような記憶現象は、古くから研究がなされ記憶における人間固有の特性を明らかにしてきた。常には完全に機能しない人間の記憶の諸特徴に焦点を当て、記憶研究の源となった研究の1つがエビングハウスの無意味綴りを使用した研究（Ebbinghaus, 1885）である。彼は自らが唯一の被験者となり、考案した子音、母音、子音の順からなる3文字の無意味綴りを用いて実験を行った。彼の研究はイギリスの連想心理学の影響を受け、日常の中の連想を排除するため有意義な言葉を使用せず、無意味な単語を材料としたと考えられる。

なかでも、保持時間の長さによって忘却率がどのように変化するかを調べた実験の結果は、エビングハウスの忘却曲線として今日なお有名である。エビングハウスの伝統は、その後、行動主義心理学に引き継がれることによって発展し、今日の記憶研究にも少なからぬ影響を与えている（森敏昭, 1995）。彼の研究は刺激と反応とからなる対連合学習であり、記憶研究というよりも言語学習に重きがあったと思われるが、意識ではなく可視的な行動を用い、実験により記憶にかかわる現象を明らかにした点は評価できる。また、現在のネットワークモデル等の連合論的考え方の基盤となったともいえよう。

しかしながら、エビングハウスの研究はあくまでも個人の記憶が対象であった。もちろん、後の行動主義者の行った実験においても、被験者の学習結果は、一人の学習者のものであるという前提でなされたものであった。言い換えれば、当時の行動主義心理学では刺激に対する反応の連合を形成する主体は個人であり、学習は個人の産物として定義されていたということである。

実験室研究から日常の記憶へ 一方、今日の認知心理学の流れの源であり、今日の記憶研究に大きな影響を及ぼした研究として位置付けられるものにバートレットの研究 (Bartlett, 1932) がある。彼は、ネイティブ・アメリカンの説話「幽霊たちの戦争」を記録材料に研究を行った。最大 10 年後まで反復して想起させた。その結果、再生内容の変容 (①省略②合理化③強調④細部の変化⑤順序の入れ替え⑥被験者の態度の影響) が生じてくること、そして、それらが過去経験を構造化した認知低枠組みであるスキーマによってもたらされるものであることを主張した。静的で受動的な記憶だけでなく、動的かつ能動的な記憶の存在を明らかにしたこと、さらに、従来の実験室研究での統制された材料や条件でなく、比較的緩やかな統制の身近な図形や物語を材料としたことは大きな意味があり、バートレットの研究が、今日の日常認知心理学の基礎を成したとされる所以である。

認知心理学における集団想起研究が行われるようになる 80 年代までの伝統的な記憶研究では、個人による記録や想起を問題として扱い、その過程の解明に多くの資源が費やされてきたと考えられる。ではなぜ、研究対象が個人の記憶から集団の記憶へと移行したのであろうか。記憶の社会性 (集団性) に焦点を当て検討する。社会性を記憶研究の変数とすることの理由は、生態学的妥当性を高める「日常心理学」あるいは「日常認知研究」の影響にあると考えられる。生態学的妥当性とは、研究によってもたらされた結果が日常生活における人の様々な行動をよりよく表しているかどうかの程度である。そのため、生態学的妥当性は、そのほとんどが他者との関わりによる社会性を帯びた事象によって成立している日常生活を反映しているともいえる。社会性の高い、すなわち生態学的妥当性も高い研究は、日常生活により直接的に貢献できることを意味する。このような生態学的妥当性の概念を記憶研究に持ち込んだのはナイサー (Neisser, 1978) である。ナイサーはそれまでの心理学研究が、その客観性や再現性といった科学性を重視するあまり実験室研究に偏り過ぎていたことを批判し、研究内容がわれわれの日常性を考慮したものであることの重要性を説いている。今日の認知心理学研究において、生態学的妥当性は重要な鍵概念である。

さらに、生態学的妥当性を高めるために社会性の概念を記憶研究に取り込むことで、可能になることがある。それは、私たちの日常における個人にとっての生活世界を形成する記憶過程を解明できるということである。私たちが日常において記憶に留める情報は、実験室において実験者によって統制されるような客観的現実ではなく、他者との相互作用の中で構成される情報である。私たちは日常生活において、伝統的な記憶研究のように、実験者によって用意された記憶材料を覚えるわけではない。会話や仕事の中での他者との関わりによって生成される情報を記憶に留めるのである。個々の情報は客観的には同じであっても、個人にとっては、その情報が誰とどのような相互作用を経て生成されたかという個々に異なる社会性に起因する来歴を持っていると考えられる。近年の偽記憶研究のように、正反応ではなく、誤反応の分析、すなわちエラーの積極的な分析によって人の記憶原理を解明できるという考え方が受け入れられるようになると、日常の事象に関する人間の記憶の不正確さを通して、生態学的妥当性の高い記憶研究が可能となるだろう。その客観的な正確さからの歪みや逸脱が対人関係などの社会性からの影響を反映していると考えられるからである。しかしながら、現実社会に貢献することを目的とする「日常認知研究は、実験室研究に比べて、確かに生態学的妥当性の高い研究になる可能性が高いのは事実であるが、その反面、「常識心理学」に陥りやすいという危険性を孕んでいる (森, 2002)」ことには留意しなければならないだろう。これらの点を考慮した上で、記憶研究も実施されることが望まれる。

2. 目撃証言研究

記銘（符号化）段階では個人であり、想起（検索）段階では集団であるパラダイムを持つ研究を議論する。個人の記銘を合わせて集団で想起する方が個人の想起よりも成績がよいことは、古くからの示唆されている。高取（1980）は詩の再生において、個人想起とコミュニケーションにより得られる共同想起との比較を行った。その結果、コミュニケーションによる共同想起の優位性が示された。これらの結果はわれわれの持つ常識とも容易に符合するものである。すなわち一人で何かを思い出すよりも、複数の人と一緒に思い出すほうが、より多くの事柄をより正しく再生できるという集団の優位性である。しかしながら、目撃証言研究といわれる研究領域からは、必ずしもそう言い切れない結果も提出されている。Alper ら（1976）は目撃者個人の事件の再生よりも目撃者が共同して再生した場合の優位性を示した。しかしその一方で、Hollin and Clifford（1983）は討議条件と非討議条件を比較した結果、討議後の再成率が有意に下がったことを報告している。目撃者個人の受けとる情報は、自らの特性によって変わってくることがあるだろう。目撃者が個々に違う情報を取り込んだとき、その後の集団想起にどのような影響が出るのだろうか。兼松ら（1996）は偏光レンズを使って二人の被験者が同じ映像を見ていると思わせながら、実際には違う色の映像を見せるという巧妙な実験を行い、目撃証言内容が話し合いにより変容することを示した。特に、後の話し合いにより、映像の中で共通した事物である「共通項目」の成績は良くなったが、映像の中で違った、例えば車の色のような「チェック項目」に関しては同調の頻度が増すことを示している。兼松らの研究は、記銘（知覚）段階の個人差を、光学的手段で巧妙に実験操作している点で高く評価できる。

日常においては、目撃証言をする場合、記銘意図がないことの方が普通である。後で証言を求められることが分かっている意図的に覚えておこうと身構えて事件に遭遇する人はいない。また、事件に遭遇した後で目撃者同士が話し合いなどのやりとりをする場合を検討した研究はある（兼松ら、1996）が、事件に遭遇しつつ集団でやりとりをすることは少ない。目撃者証言研究の多くは、個人が偶発的に遭遇する事態に対する記銘意図のない学習である。これらが後述する共同記銘研究との相違点の一つである。

3. 集団での記憶

共同想起研究 森直久（1995）によれば、想起とは過去を語る活動を意味する。また、従来の共同想起研究は二つに大別されるとして、記憶や想起そのものへ関心がある研究の流れと、集団による意志決定や個人と比較した場合の集団の生産性に関心がある流れがあるとする。想起は記憶の再構成と捉え、単純な過去の再生とは見なさない。むしろ過去の事象を現在の時点で作り変えたり、新たに作り出す再構築過程とみることが特徴でもある。それ故、想起を「語り」として捉えている。さらに記銘事態については深慮しないとも考えられるのである。すなわち記銘事態の集団性・社会性には関心を向ける必要がないともいえよう。あくまでも関心の焦点は想起にあり、想起のみが研究対象として位置づけられている。そのため、記銘時の状況でなく想起時の状況に重点を置く立場といえるのである。

共同記銘事態の集団性 筆者らは記銘事態における集団性も重要であると考え。共同想起場面で行われる想起はその場における集団性だけでなく、記銘時における集団性もまた大きく影響すると考えるからである。例えば、共同想起の実験では、集団による想起と個人による想起とを比較しているが、例えば会話の想起のように、想起される情報が他者との相互作用の産

物である場合、その情報の生成に関わった他者の要因を考える必要があるだろう。同じ発言であっても、記録時において誰によって発せられたかによってその言外の意味が異なることがある。会話の参加者間の親密性によってその場の雰囲気も異なるだろう。記録時の集団の特性や相互作用の内容などを考慮することは、日常記憶研究の生態学的妥当性を高める上で重要であると考えられる。集団性については森直久（1995）に詳しいが、集められた人がそこにいるだけでアプリアリに集団という定義をしていることに問題はないだろうか。たとえ同じ経験をする人の集まりであっても、その集団を構成する成員間の関係や相互作用の有無などが、想起の対象である原記憶を構成する行為に影響すると考えられるからである。もちろん、想起を原記憶の再生ではなく再構築（restructive）とし、想起は「語り」という行為で原記憶からは独立した機構であるという仮定で検討する共同想起研究者には、大きな問題ではないのかもしれない。しかしながら、原記憶の内容である事象に、複数の人が関与しているのであれば、完全にそこでの関係性を見過ごすことには抵抗が残る。記録時における集団性あるいは社会性を考慮し検討した上で、想起場面の集団性に主題を移すことも必要ではないだろうか。さらに記録時における集団・社会性については、次節でも考察する。

4. 共同記録研究

集団が個人の認知へ影響することを示したのは Sherif (1935) である。彼の実験は、自動運動という仮現運動を用い、実際には動きのない静止光点が動いたと感ずる程度を被験者に 100 回報告させた。その結果、集団で参加し最後に個人で光点を見た（集団→個人）群では最初からある一定の運動を皆が報告し、最後の個人条件で報告が大きく変化することはなかった。一方、はじめに個人で光点を観察し、その後集団で観察した（個人→集団）群は当初様々な範囲の報告が見られたが、集団条件に移行すると次第に報告された運動範囲が一定の数値に収斂していった。Sherif (1935) は、集団で認知作業を行うことで個人差がなくなり、一定した認識が生じることを示唆したことで意義ある研究であるといえよう。このような集団による認知が個人の認知とは異なる処理がなされていることを指摘する研究は社会心理学の領域で散見されるが、記憶という認知過程を直接解明する研究ではなかった。

筆者等の提言する共同記録研究では、集団・社会性が及ぼす影響という側面から記憶という認知処理過程を解明しようとする。そのために、集団性の影響を正再生、正再認という肯定的側面だけでなく、忘却や偽記憶（false memory）に見られる負の側面からも検討する。偽記憶とは、実際には経験していない出来事を経験したと思いつくことである。共同で記録する際に、例えば話し合いなどで偽記憶も出現することが予想されるからである。

共同記録研究の必要性 共同想起研究では記録への関心以上に集団における想起に対する関心が高い。そのため記録時の集団性・社会性に関して問題としていないともいえる。さらにいえば、共同想起研究では、想起における集団には、想起を遂行する必然性が必要であり、集団の性格と想起の様式は弁証法的関係にあり、確立した後は相互規定的に発展するとしている。人は誰かに向けて何かのために想起（語り）をするとしている。森直久（1995）は「現在における特定の過去の出来事の想起は、（中略）過去に出生を持ちながらも、現在、想起者が直面する状況に依存する（p124）」とし、純然たる個人想起は想定しえないと考えているのである。記録時を考える時、この論理の一部を当てはめることができるだろう。記録意図を持った認知処理が行われる場合は、誰かのために、何かのために記録する。共同記録においては、関係する他者が状況になり、社会性が大きく働くことが考えられるのである。また、直接の記録意図

を持たない事態であっても、共同で問題解決や何らかの相互作用を行う事態であれば、その事態に即した目的を持ち、その目的を共同で達成するために必要な情報を記録すると考えられる。例えば、当面の問題を解決するために話し合いを行う場合であれば、話し合いの過程において誰が何をどのように発言したかを覚えておかなければならないだろう。この場合、個々の発言を記憶することが目的ではなく、話し合いを成立させるために記録されるのである。

共同記録研究における個人想起 共同想起研究においては純然たる個人想起はないとの考えもあるが、一般には個人想起は日常性が高いものである。いわゆる、話し合いなどの相互作用をしないで思い出すことは多くある。後述する教育場面における試験や、会議での記録をまとめたり、日誌をつけたりというように他者のためだけでない自己経験の記録を残す場合は、多くの場合が個人想起である。このような場合の記憶過程の解明は、共同記録と個人想起事態の研究に依るのではなかろうか。さらにいえば、偽りの記憶へのアプローチが記憶過程の解明につながるであろう。特にエピソード記憶における情報源同定（ソースモニタリング）過程の解明などがテーマになると考えられる。Wagner (1984) は、会話の偶発的な記録に関与する要因として記憶の個別実験によって検証された自己生成効果と自己参照効果との関わりを調べている。Wagner (1984) の主たる仮説は以下の2つである。1) 話し手は、話し合いの間に聞いた他者の発言よりも自分自身の発言のほうを正確に同定できる（自己生成効果と自己参照効果の両者が関与する）。2) 検索時に自己スキーマを参照することで、発言者の同定が正確になる（自己参照効果）。Wagner (1984) は、実際の会話を材料として、発言者の同定の正確さを指標とした実験を行っているが、明確に仮説を支持する結果は得られていない。筆者らは会話、会議を模して、単語の想起を共同で行わせる実験を行った。その結果、親密度によって情報源同定が変わることを示した（有馬・中條, 2003）。実験室研究ではあるが、共同での記録を考慮した研究に位置づけられると考えている。今後はさらに洗練した研究を行い、以下で考察する応用研究へと繋げていくことが必要である。

教育現場での学習活動 教育現場における学習は、これまで実験室的な記憶研究の応用領域として研究されてきたことが示すように非日常的な事態と捉えることのできる側面を有している。授業において教師によって提示される情報を記録意図を持って正確に記憶し、その後に、試験というそれらの情報が使用される必然性の無い状況において想起することが求められるからである。私たちは日常生活においては思い出す（想起する）ことを常に意識しているわけではない。つまり意図的な記録をしていないことの方がほとんどではなかろうか。後で記憶内容を正確に再生・再認する必要がある場合でなければ人は意図して記録しようとはしない。何より、自分自身の発言や行為の記録でなく、他者のそれらの行動を記録しようとはしないことが普通である。日常の会話を例に取れば、どのような内容の発言か、それは誰の発言かといった事柄に関しての記録意図を有さずに会話している。さらに、自らの記憶が他者によって評価されるといったことも日常的ではない。しかし、学校現場においては想起を期待しながら他者によって提示された情報を記録する必要がある。このような教育現場観は、教師中心の一斉授業に当てはまるものであろう。

しかし、一方で、教育現場にも日常記憶的な視点で捉えるべき側面がある。例えば、小集団学習や発見学習などのように学習者もまた情報の作り手となる学習活動であり、学習者の主体性を重視する教師による授業である。

学習者中心の授業では、学習者の主体的な活動が増え、学習者間や学習者－教師間の相互作用が行われる。これらの相互作用による学習は、共同記録の事態と捉えることが可能である。すなわち、学習者個人が単独に学習を進めるのではなく、他者との関わりの中で学習がなされ、

共同で記銘をすると考えられる。筆者等が提唱する共同記銘事態に関する記憶研究が行われることで、学習者中心の授業に対して有用な知見をもたらす可能性がある。

臨床への応用 これまでの記憶研究が心理臨床に影響を与えたとされる論争から考察する。そして、共同記銘事態の臨床での応用の可能性を検討する。偽記憶と回復された記憶論争における記憶研究者と臨床家との争点は、カウンセリングに関する論争であった。心理療法で思い出された過去の虐待等の記憶が、作り出されたもの（偽り）であるか否かが争点であった。実際に、クライアントが思い出した過去は事実ではないことが証明された事例もある（例えば、「パンチボール事件」；Hyman & Billings, 1998）。一方で、その事実が真実であるかどうかを現実世界に求めることは、相談中のクライアントにとって無意味であり、むしろ彼らの語った事実をそのまま認め内面世界における真実性を尊重するのが臨床の立場であるとする意見も少なくない。

しかしながら、目撃証言研究と同じように、過去の記憶が裁判の争点となる時は、あくまでもクライアントの内面的世界ではなく、現実世界における真実性を検証する姿勢が必要になってくる。しかしながら、従来の多くの偽りの記憶に関する実験では、それらが十分に検証できているとは言い難い。現在の共同想起研究では、カウンセリングや心理療法との偽記憶の論議を直接的には検証できないといわれている（高橋, 2002）。その理由は2つある。上述したように、共同想起では、一般に共通の経験を持った人が集まって想起をする場合に限定されていることである。もう一つは、ほとんどの共同想起研究において、実験参加者に想起の正確さが目的として与えられていること（森直久, 1995）である。クライアントが過去を語る際、治療が優先され、内容の客観的な正確さを要求することはないからである。換言すれば、共同想起の研究では、同じ経験（記銘）をした複数が集まり、思い出した内容を話す（想起する）手続きで行われているからである。カウンセリングでは、カウンセラーとクライアントという別々の記憶（経験）を持った二人が、クライアントの記憶を協同で想起しようとする事態である。目撃証言研究においても、共同想起研究でもまったく別個の記憶を前提に、想起を検討した研究はない。筆者らが着目する側面は、カウンセラーとクライアントのカウンセリングの記憶である。カウンセラーとクライアントの間でなされるカウンセリングは、二者関係で行う共同記銘事態の一つとして考えることができる。すなわち、カウンセラー側からいえば、クライアントと相互に言語的やりとりをしたことを覚え（共同記銘）、後にその事象に関して回顧（想起）する。両者の関係性（社会性）の違いによって回顧された記憶はどのような影響を受け、変容するのか。想起時には、共同想起研究のような他者はいない。一人カウンセラーが過去の相談内容を再現しようとする。そこでは、上で述べた情報同定の誤り等、共同記銘事態と同様の認知的な処理が行われていることが予想される。今後、共同記銘研究によってもたらされた知見を生かすことで、カウンセリングをはじめとする心理臨床現場への記憶研究の貢献可能性が高まることが期待される。

引用文献

- Alper, A., Buckhout, R., Chern, S., Harwood, R., & Slomovits, M. 1976 Eyewitness identification : Accuracy of individual vs. composite recollections of a crime. *Bullrtin of the Psychonomic Society*, 8, 147-149.
- 有馬比呂志・中條和光 2003 情報源の同定における参加者間の親密度の効果 日本認知心理学会第1回大会発表論文集, 140-141.
- Bartlett, F.C. 1932 *Remembering*. Cambridge University Press.
- Ebbinghaus, H. 1885 *Über das Gedachtnis*. Dunker.
- Hyman, L. E., Jr. & Billings, F. J. 1998 Individual differences and the creation of false childhood memories.

Memory, 6, 1-20.

- Hollin, C. R., & Clifford, B. R. 1983 Eyewitness testimony : The effect of discussion on recall accuracy and agreement. *Journal of Applied Social Psychology*, 13, 234-244.
- 森 直久 1995 共同想起事態における想起の機能と集団の性格 心理学評論, 38, 107-136.
- 森 敏昭 1995 記憶のしくみ 高野陽太郎 (編) 認知心理学 2 記憶 東京大学出版会
- 森 敏昭 2002 日常認知研究の現状と今後の課題 井上 毅・佐藤浩一 (編著) 日常認知の心理学 北大路書房
- Neisser, U. 1978 Memory: What are the important questions? In M. M. Gruneberg, P. E. Morris & R. N. Sykes (Eds.), *Practical aspects of memory*. Academic Press.
- 太田信夫 2000 現代記憶研究概観 太田信夫・多鹿秀継 (編著) 記憶研究の最前線 北大路書房
- Sherif, M. 1935 A study of some social factors in perception. *Archives of Psychology*, 52, 1061-1086.
- Tulving, E., Schacter, D. L. & Stark, H. 1982 Priming effects in word-fragment completion are independent of recognition memory. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 8, 336-342.
- 兼松 仁・守 一雄・守 秀子 1996 異なる事態を目撃した2人の目撃者の話し合いによる記憶の変容 認知科学, 3, 29-40.
- 高橋雅延 2002 偽りの記憶と協同想起 井上 毅・佐藤浩一 (編著) 日常認知の心理学 北大路書房
- 高取憲一郎 1980 記憶過程におけるコミュニケーションの役割—個人再生と共同再生の比較研究— 教育心理学研究, 28, 108-113.
- Wagner, W. 1984 Recognition of Own and others' Utterances in a Natural Conversation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 10, 596-604.

—平成 15 年 10 月 21 日 受理—